

平成17年度(2005年)

海外行政視察報告書

(ニュージーランド・オーストラリア)

平成17年7月1日(金)～8日(金)



ケアンズ市の環境保護の取組を視察 (AUS)



フランクリン行政区担当者との情報交換 (NZ)



世界遺産の熱帯雨林 (AUS)



本当に広い! ずっと先まで牧草地 (NZ)

田 原 市 議 会
海 外 行 政 視 察 団

目 次

巻頭あいさつ	1
視察調査レポート	
中部国際空港セントレア	2
オーストラリア入国の税関で	3
【ニュージーランド】	
ワイトモ鍾乳洞視察（ワイトモ）	4
『ターナー＆グローワーズ』市場視察（オークランド）	5
フランクリン地区行政区の行政改革の取り組み視察（プケコヘ）	5
オークランド滞在中の所感	7
ニュージーランドからオーストラリアへ	9
【オーストラリア】	
ウェットランドの植林地区視察（マリーバ）	10
世界遺産『熱帯雨林』視察（キュランダ）	12
グレートバリアリーフ等の環境保護の取り組みの視察（ケアンズ）	13
ケアンズ滞在中の所感	15
眼下にグレートバリアリーフを眺めつつ、日本へ！	16
田原市議会海外行政視察日程表	17
田原市議会海外行政視察団名簿	18
編集後記	19

巻頭 あいさつ

田原市議会海外行政視察団

団 長 鈴木 勘 一 郎

21世紀は「環境の時代」と言われています。1997年12月に京都で開催された地球温暖化防止京都会議で議定書が採択され、2002年にEUと日本が、2004年11月にロシアが議定書を批准し、2005年2月に二酸化炭素などの温室効果ガスの排出削減を義務付ける「京都議定書」が発効されました。また、21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決の方向性と人類の生き方を発信するため、多数の国・国際機関の参加の下、自然の叡智をテーマとした新しい文化・文明の創造を目指して開催されている愛・地球博でも地球環境問題は大きなテーマのひとつとなっています。

私たちが住む地球、その環境がこれほど関心を集めたことはありません。「地球の未来を守るためには、どのような指標をつくらなくてはならないのか。」「どのようにしたら、住みよい地球を生み出せるのか。」といった議論がなされ、これをいかに実行するかが問われています。

田原市においては、たはらエコ・ガーデンシティ構想を立案し、菜の花エコ、廃棄物リサイクル、エコ・エネルギー導入等7つのプロジェクトを推進し、全国で7箇所の環境共生まちづくりモデルのひとつに選定されるなど、環境問題に正面から取り組み、地域資源の活用を図り、環境負荷の低減・地域環境の健全化を進めてきました。

私ども、田原市議会海外行政視察団一行は、今回、世界における代表的な熱帯雨林や海岸に広がるマングローブ林、世界最大のサンゴ礁などのすばらしい自然やその自然環境保全への取り組み、自然に連なる農業地帯・観光地帯の視察、加えて、行政改革の先進地であるニュージーランドの自治体の行政改革の取り組みや実施後の状況等について視察を行いました。

帰国後、視察研修の結果を報告書にまとめましたので、田原市のさらなる発展のために諸問題の取り組み、研究・検討をしていく際に何らかの参考としていただければ幸いです。

視察調査レポート

【中部国際空港セントレア】7月1日

我々海外行政視察団は、鈴木勘一郎団長はじめ、議員9人と議会事務局職員1人を
含む10人で15時に田原市役所庁舎をバスで出発し、「愛・地球博」に合わせて開港
した中部国際空港セントレアに向かった。1時間30分ほどでセントレアに到着した
が、東名高速道路からセントレアまでの道路は整備され、知多半島の道路状況はうら
やましい限りである。東三河地区では、現実に国道23号バイパスから三河港への道
路アクセスは抜本的対策がないため、渋滞が引き起こされている。この日も車が動か

ないようなところもあった。この差
は大変大きいと強く感じた。

セントレアの印象は段差がなく
移動が簡単という感じである。「年齢
や障害の有無に関わらず、すべての
人に使いやすい」というユニバーサ
ルデザインに基づく設計をしている
とのこと。そのほかにもコンパクト
にまとまっており、大変使い勝手が
よいのではと感じた。最新の施設で
心配ないと思うが、空港島というこ



乗降客、見学者でにぎわう中部国際空港(セントレア)

とで大地震による津波・液状化対策
はどうなっているのかが気になった。また、見学者も多く、土日はまだ大変混むそう
である。実際、搭乗前に軽食をと思ったが、多くの店が満席でなかなか食べることが
できなかった。風呂も設置されているとの
ことだが満員だったとのこと。

搭乗手続きはスムーズで、空港内の表示
も分かりやすく、この点はまずまずといっ
たところか。搭乗後、午後8時出発の予定
が40分遅れの出発となった。

フライトでは赤道付近を通過した際、天
候が悪く、雷の青色の光が時々飛行機を包
んでいた。また、時差のない夜間のフライト
で十分睡眠できた方、席が狭くて寝られ
ない方など人それぞれであった。



なだらかに上昇する動く歩道

【オーストラリア入国の税関で】7月2日

まだ日が昇る前の午前4時20分頃、予定の約10分遅れでケアンズ国際空港に到着。ここで、オーストラリアにいったん入国し、ブリスベン経由でニュージーランドへ向かうこととなっている。添乗員から「オーストラリアとニュージーランドの税関は食品や植物等の持込等は大変厳しいので、気をつけてください。もし、持っていたら、入国審査の際には、隠さずに申告をしてください。」と注意があった。



ケアンズ空港（国内線）

さて、入国審査、通関を終えて、出口の所へみんなが集合しているが、S議員だけがなかなか出てこない。近くにいた議員が「通関で止められて、別の場所へ連れて行かれたようだった。」と説明してくれた。振り返って通関を見ると2人の検査官と話しているのが見えた。幸い、10分足らずで開放され、合流することができたが、S議員に理由を尋ねると

「自分が知らない内に家内が梅干をスーツケースに入れてくれたらしいが、入っていること自体を知らないの持込の該当はないと申告した。しかし、スーツケースをX線で調べたときに木の実を持ち込もうとしているとの疑いを掛けられ、取り調べられたようだ」とのこと。オーストラリアやニュージーランドでは、自国の農産物や植物を守るため、日本に比べて大変厳しく持ち込み審査を行っている。農業立国で自国を守るための取り組みであり、罰金をかなり高額で課せられるケースもあるらしい。結局、S議員は、お咎めなしで梅干を持ち込むことができた。

なお、ニュージーランドでは、S議員はきちっと申告し、無事持ち込むことができた。しかし、ホテルへの移動のバスの中で他のメンバーに「例の梅干」と披露し、3分の1ほど食べて、座席においておいたのだが、降りる際に忘れてしまい、翌朝、バスが来たときには片付けられており、苦労して持ち込んだS議員にとっては大変残念であった。

また、ケアンズ空港では乗客の荷物の積載量オーバーのため、我々視察団に対し、シドニー経由ニュージーランド行きの飛行機に変更の打診があり、最終的な到着時間も変わらないため、承諾した。ニュージーランドへ向かい、午後4時30分ごろ到着した。



ニュージーランドでの宿泊ホテル
(ヘリテージオークランド)

【ニュージーランド】

【ワイトモ鍾乳洞視察（ワイトモ）】 7月3日

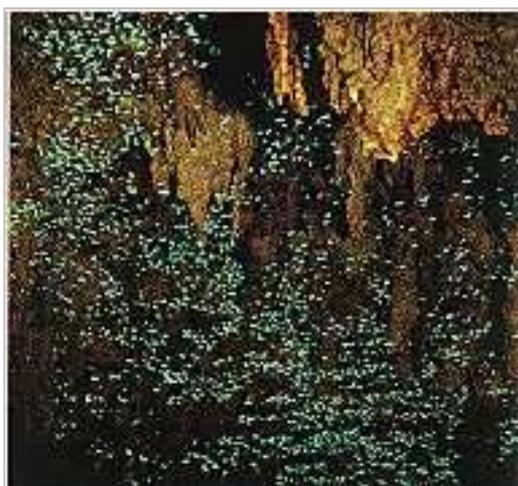
午前6時30分にモーニングコールで目覚め、朝食後、バスで200km離れたワイトモ鍾乳洞へ向かう。気温は低く、道路と並行して流れているワイカト川（ニュージーランドで1番長い川）の水面は気温と水温の差から霧が立ち込め、川辺には霜も下りていた。この行程では、バスの窓越しに見える風景は広大な牧草地が多く、荒地はほとんど無く、よく手入れされていた。放牧されているのは、牛が多く、他には羊や馬が放牧されていた。ダチョウも1ヶ所で飼われていた。



ワイカト川（奥は火力発電所）

午前11時にワイトモの鍾乳洞に到着したが、鍾乳洞入口でたまたまニュージーランドを旅行中の田原市職員に出会い、お互いにびっくり、世の中は狭いものだと感じた。さて、鍾乳洞は100年以上の歴史があり、20世紀の始めに洞窟の所有権は政府の手に移り、1989年に鍾乳洞と周辺の土地は当初の所有者たち（先住民族であるマオリ族）に返還され、彼らの手で管理されているとのことである。

この鍾乳洞にはえさを引き寄せるために光を放つ土ポタルが多数生息しており、観光に開放されているが、大変、大切に利用されているようである。もし、この繊細で壊れやすい環境に害を与えた場合、2ヶ月以下の禁固や1,000ドルの罰金が課せられるとのことである。鍾乳洞に入ると、土ポタルは音やフラッシュが光ったりすると発光しなくなるため、ある地点からは撮影禁止、無言で進むようにとのことである。「これを守らない場合は、登録ガイドの資格が停止となるので必ず遵守してください。」とガイドから強い依頼があった。そして、鍾乳洞の奥の地底の川を船で進むと、まさに満点の空の光り輝く星のように青い光を放つ土ポタルが天井一面に広がっており、しばし見とれてしまうほどの美しさであった。自然環境の破壊をよく耳にするが、世界の財産として永遠に守ってほしいと思う。



ワイトモ鍾乳洞の土ポタル（絵葉書）

【『ターナー＆グローワーズ』市場視察（オークランド）】 7月4日



『ターナー＆グローワーズ』市場（担当者の説明）

ゲン菜、白菜、にんじん、かぼちゃ、玉ねぎ、ジャガイモ、キャベツ、カリフラワー、セロリ、トマト、きゅうり、パプリカ、バナナ、キウイフルーツ、みかん、りんごなど多種にわたり扱っている。「日本へも多く輸出しているが、見てくれがよくないと日本では買ってもらえない。日本の基準の2等品は国内で消費している。」と担当者は笑いながら説明してくれた。花市場も見学したが、日本のシステムと同様のボタンによる入札制度でセリをされているようである。

この野菜・果物の市場は、100年前に設立され、南半球では最大の取扱量を誇っており、500社のバイヤーと10,000社のサプライヤーと取引しており、オークランド市の消費量の35パーセントを取り扱っている。市場はハード物、グリーン物、果物の3セクションがあり、番号、記号で生産地、生産者がわかるようにしてあった。品物としてはサツマイモ、カブ、ルーバー、ズッキーニ、チン



バナナ熟成用倉庫（ガスで熟成）

【フランクリン地区行政区の行政改革の取り組み視察（ブケコヘ）】 7月4日



フランクリン地区行政区事務所入口

ニュージーランドは行政改革の先進地といわれている。一時期、社会保障制度が大きな負担となり、国が破綻しそうになり、1989年から国主導による行政改革が行われたとのことである。

今回、視察を受け入れてくれたフランクリン地区行政区は田原市と似ているところがあり、農業が中心で工業もあるとのことだが、鉄道もあり、交通の便は良いらしく、この点は田原市とは違うようである。工業は海岸に鉄分を含んだ砂があり、それから



フランクリン地区行政区事務所庁舎

鉄を取っているとのことである。

行政区の事務所について驚いたのは、日本の市役所とは違い、小さな建物であり、驚かされた。行政区事務所のあるプケコへの町は15,000人の人口で緑が豊かできれいな町といった印象であった。

最初に区長（オークランド近隣で1番若い首長とのこと）があい

さつをされ、大変、歓迎をしていただいた。区長の退席後、コミュニケーションアドバイザーのケン氏が対応してくれた。この行政区の人口は52,000人で、32歳から55歳ぐらいの人が多く、20代は都会に、高齢者も他のまちに住むことが多いようである。



フランクリン行政区区長と懇談

この行政区の目標としては、文化、ビジネス、レクリエーション、他の町との関係などすべての面で自然と調和してやっていきたいとのことであった。

現在、フランクリン行政区は同じ規模の4つの地区があり、各区3人の議員が選ばれ、区長と12人の議員の13人で議会を構成している。任期は3年とのことである。

改革以前は、行政区は5地区で5人のリーダーと30人以上の代議員がいて議会を構成していた。大変なスリム化である。議会は10年後の目標を立て行政執行をする。あわせて1年ごとの計画を立てて、実行し、フォローアップしていくとのことである。大切なこと、大きなことは議会にかけて決定していくが、小さな事柄は議会を通さずに仕事を進め、市の財産を管理している。改革前には500人ほどいた職員も現在は4部9課124人



フランクリン行政区担当者の説明

とのことである。これはごみや道路の維持などできることはすべて民間委託で対応してきた結果である。委託先等は入札の金額と一般の評判等も加味しながら、確認し決定しているとのことである。

また、市議会は会社の社長に当たるチーフエグゼクティブを1人雇い、他の市職員はチーフエグゼクティブが雇うようになっており、日本とは違って、人員調整がしやすい仕組みになっているようである。チーフエグゼクティブの任期は5年である。行政改革は、1989年に中央政府から指示が出され、改革に取り組み、現在に至っている。この改革が軌道に乗るまでは7年から8年程度かかったとのことである。2002年に過去の改革の見直しを行い、市民の希望により対応を変えることもできるようになってきている。

【オークランド滞在中の所感】7月2日～4日

ニュージーランドは人口約400万人であるが、ここオークランド市はニュージーランドでは一番大きな都会であり、人口は100万人ほどで、国の人口のおよそ1/4ほどがすんでいる。市内には、ニュージーランドでの航空拠点であるオークランド国際空港やオークランド港を持ち、大変美しい町である。地形的には起伏がけっこうあり、坂が多い。街の中に小高い丘があり、これは寄生火山とのことである。この国では、鉄道などの公共交通機関は非常に便が悪く、自動車が移動の中心である。しかしながら、人口400万人ということもあり、自国の自動車メーカーは無く、日本車が80%以上使われているとのことである。ヨロロッパ車の中古車も日本から持ち込まれるらしい。また、オークランド市は近年急激に人口が増えたため、道路整備が追いつかず、よく、渋滞が起きるとのことである。実際に渋滞解消のため、新しい道路の工事が行われている。



寄生火山イーデン山からオークランド市街を望む
(写真左側の丘も寄生火山)



イーデン山山頂から(参加者全員で)

に治安が悪くなってきている。市民の中には、安全は自分で守るとの意識が強まっており、市内の住宅の塀が高く、セキュリティ装置をつける家が増えたとのことである。

この国の主要産業は酪農を中心とする農業と観光で、市内の店には日本人も多く働いていた。韓国の人もかなり多いという感じを持った。また、日本(田原市)の冬ほど寒いということはないが、

昔のニュージーランドは高福祉国家で豊かな国といわれたこともあったが、最近、高齢化や国の財政状況もよくないことから低所得者層に不満があり、非常



主要産業は農業(牛の放牧)



オークランド市内のマーケット

一応冬であるにもかかわらず、半袖で歩いている人がいたりした。視察団のメンバーは、スーツでも寒いと感じるのに、チャーターしたバスのドライバーもずっと半袖であった。こちらの人は寒さに強いのかも知れない。

有志数人で南半球一番の高さという「スカイタワー」に上ったが、上から見る町並みは大変きれいだった。また、自分たちが夜の街を歩い

たり、買い物をしてそんなに不安になるようなところはなく、街を十分に楽しむことができた。(もちろん、危険なところにはっていないが、治安が悪いという感じはあまりしなかった。)

もう一点、強く感じたことは、ホテル内での喫煙の取り扱いである。日本ではロビーや廊下では禁煙でも個人が宿泊する部屋では喫煙可能の場合が多いが、ニュージーランド(オーストラリアも同様)では部屋の中(ベランダも含めて)でも禁煙であり、部屋で喫煙をしたい場合は予約する時に喫煙可能な部屋を取らなくてはならない。喫煙される議員は、大変ご苦勞をされたのではないかと思う。日本のホテル等でも将来はこうした取り扱いが増えていくだろう。



南半球一の高さ！ スカイタワー（328m）
展望室の床は一部ガラス張り、目がくらみます。



スカイタワーからのオークランド市街



スカイタワーからオークランド港をのぞむ

【ニュージーランドからオーストラリアへ】7月5日

この日は、オークランドからシドニー経由でケアンズまで移動。出国審査・入国審査、通関も慣れたもので、何の問題もなく、スムーズに完了。この日は、ゆったりとした快適な空の旅で、シドニー発ケアンズ行きの飛行機の窓からシドニーの街並みを見ていたら、有名なオペラハウスが見えた。今度、オーストラリアに来ることがあったら、ぜひ訪れてみたい。



飛行機の窓からシドニーの街並み

現地時間の午後4時30分頃、ケアンズ空港に到着し、ホテルに入ったが、日本人の多いのに大変驚いた。ホテルでは喫煙可能な部屋をお願いしたため、3階から9階まで分散して宿泊することになった。気候は、亜熱帯ということで、冬だが大変暖かく、湿度が高い。街は観光客が多く、お店やホテルが立ち並んでいる。観光立市という印象である。



ケアンズ市街（天気は雨）



オーストラリアの宿泊ホテル
(ケアンズ・インターナショナル)のロビー

【オーストラリア】

【ウェットランドの植林地区視察（マリーバ）】 7月6日

自然環境を守るための取り組みを視察するという今回の視察目的のひとつであり、植林体験を行うということも含め、興味と期待を持って目的地へ向かった。出発するときは雨が降っており、予定の視察ができるか不安であったが、目的地（マリーバ）が近づくうちに天気も回復してきた。熱帯雨林の中をバスで走り、雨林が途切れた場所では、牧草地やサトウキビ畑などを目にしたが、これらも熱帯雨林を切り開き、作られたものであるとのことであった。

1時間程度で目的地のウェットランドに到着した。ここは標高500mで灌漑用水の残水が集



開放されているラグーン（ため池）



ビジターセンターでバードウォッチング

まる大きなラグーン（ため池）が8カ所あり、珍しい野生動植物が生息する自然保護区（サンクチュアリ）となっており、面積は2,000ha、年間を通じて温暖で適度の降雨があるとのことである。ここは、マリーバ市とウェットランド財団の管理下で自然が守られ、8つの池の中の一つを中心とする地区が一般に公開されている。鳥等の楽園となっている一帯を公園として整備し、一般の方に自然観察を

してもらい、自然環境保全に関心をもってもらおうということである。公開している地区は池とその周辺部で、池は1,200エーカー（約50ha）の広さに鳥が200種類、魚が12種類生息している。1994年に公園が整備され、1999年にビジターセンターが完成しており、ゆったりと自然に触れることができるようになっている。池は電気モーターのボートで見学をしたが、池の



池の中の木で羽を休める鳥たち

中にはハスもあり、自然の音以外の音はなく、鳥たちが静かに舞ったり、羽を休めたりしている。ここは自然環境保全が第一優先であり、決して観光施設ではないとのことである。



300本の植樹(みんな手慣れたもの)

また、人類の移住が始まって以来、森林を伐採し家を建てたり焼畑にしてきた。その結果、生態系が変わり死滅した太古の森林をこの地区によみがえらせるプロジェクトが立ち上がっている。今回、このプロジェクトの植林作業に参加をした。池の周りに外来種の草木が増えているので、これらの草木を焼いて、本来の在来種の木を植えていき、太古の森林を再生するものである。



心を込めて1本1本丁寧に

我々は、池の周りに6種類の在来種の木を1人当たり



植樹後、植林参加証明書をもらう

20本の200本を植樹する予定だったが、全員がこのような作業になれているためか、予定よりかなり早く進んでいく。それを見た公園のスタッフが追加の木を持ってきたため、結局、300本程度の木を植樹した。5年から6年で立派な木に成長するとのことで、これらの木は雨季の湿潤、乾季の乾燥にも適応できる能力があり、植林後、2・3年は雑草の管理等を行い、後は自然に任せていくとのことである。日本の企業もこのプロジェクトに資金援助しているとの説明を受け、50年後、この木たちがどのような

20本の200本を植樹する予定だったが、全員がこのような作業になれているためか、予定よりかなり早く進んでいく。それを見た公園のスタッフが追加の木を持ってきたため、結局、300本程度の木を植樹した。5年から6

年で立派な木に成長するとのことで、これらの木は雨季



植樹後、全員で



道の両側の植樹された木々

るかと思いをいただく。完了後、公園のスタッフ、ボランティアとバーベキューで昼食を取ったが、スタッフから「普通、予定本数の半分ぐらいで終了になるが、200本の予定で300本も植えて、時間も余った。本当に驚きました。あなたたちは本当に市議会議員なのですか。」と冗談を言われたりもした。しっかり、汗をかいたが、思い出に残る植樹体験であった。

【世界遺産『熱帯雨林』視察（キュランダ）】7月6日

植林作業を終えて、世界遺産である「熱帯雨林」を持つバロン溪谷国立公園をスカイレール（ロープウェイ（スキー場に設置されているような6人乗りタイプ）で上空から視察しました。スカイレールは、1995年に完成し全長7.5km、建設に当たっては、熱帯雨林保護のため、支柱は全て現場までヘリコプターで運ばれたとのこと。



スカイレール・キュランダ駅

この熱帯雨林は1億2000万年前にオーストラリア大陸全体を覆っていた巨大な森林の一部分で、特有の動物（ヒクイドリ、マスキーラットカンガルー等）がいて保護されている。



熱帯雨林を流れるバロン川

この一帯は木々の枝、葉による緑の天蓋で地上が覆われ、雨、風、日光から地表を守り、湿度を捉える毛布のような役割をしているとのことである。

上空から見る熱帯雨林は50メートルに達する高木や多種類の植物やその形態等に目を見張るものがある。熱帯雨林の中をバロン川が流れ、滝があり素晴らしい自然の姿を見ることが

できた。スカイレールの途中駅では一度降車し、熱帯雨林の中を200メートル近くの遊歩道が整備され、自然に触れることができるようだ。こちらは観光資源・施設という感じが強く、実際、観光客で大変にぎやかであり、駅も混雑していた。もちろん、環境保全のために色々手を



上空から見た熱帯雨林



スカイレール途中駅の遊歩道

尽くし、観光収入からも保全のためにお金を使

っていると思うが、環境保全と観光資源としての利用の両立は大変難しいと感じた。また、自然環境を維持するためには、破壊が始まる前に取り組むことの重要性、遅くなれば、経済的負担が更に大きくなるのか、などと思いつつ、スカイレールを降りた。

【グレートバリアリーフ等における環境保護視察（ケアンズ）】 7月7日

いよいよ、今回の視察における最後の視察となり、ケアンズ市役所（ケアンズ・シティ・カウンスル）に向かった。市庁舎は最近立てられたばかりで大変立派な施設であった。ケアンズ市役所においては、我々の訪問に対し、ケアンズ市当局2名、国の職員1名の計3人の方（男性1人、女性2人）が対応してくれた。

ケアンズ市としては、市の南側に市街を広げる計画をしており、その計画の中では、動物が行き来できるように森林を残していきたいとのことで、開発に関するデベロッパーには動物の区域を設定する条件をつけており、現在ある木を切らず、動物等が移動しやすいように計画をしている。野鳥等のため、市の周り



ケアンズ市役所（正門・庁舎玄関・ロビー・案内所）

りにある湿地帯の保全も考えていきたい。また、ケアンズ市の外まわりをウォーキング・トレイルで結び、散策できるようなことも考えていきたいとのことであった。



対応していただいた市及び州の職員と鈴木団長

クィーンズランド州では年700万オーストラリアドルの予算で生態系に悪影響を及ぼす動植物を駆除しており、植樹も1ヶ月に2,000本ぐらいしているとのことでした。

グレートバリアリーの管理は、国の仕事であるが、州としても協力しており、この海に生息するジュゴン、イルカ、鯨などの多くの生物がいる。ホエールウォッチングなどに対してもきめ細かく規制しているとのことである。鯨の保護にはかなり力が入っているようである。

我々の質問では、観光と自然との兼ね合いをどのようにとらえているか。植樹の方法や植樹後の管理は。グレートバリアリーフでオニヒトデの被害はあるか。珊瑚の種類は。京都議定書に対する考えは。等の話題が出ました。答えにならないようなやりとりもあったが、観光客が来ないとケアンズ市は生きていけない。その

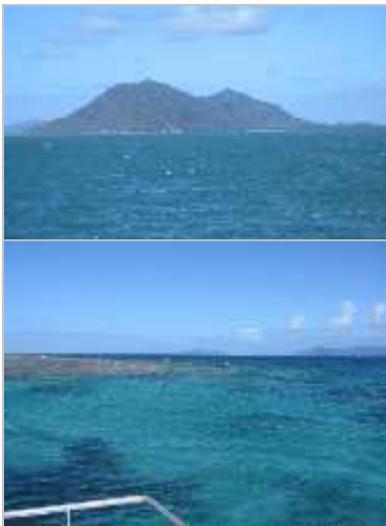


環境への取り組みについて視察

も州も京都議定書については、YESであるが、国はNOである。私たちは既に取り組んでいる。というような回答があった。

ケアンズ市役所でも大変親切な対応をしていただき、おかげで自然環境保護に対する考え方等についてしっかり研修することができた。

昼食後、グレートバリアリーフとグリーン島を視察したが、島に渡る船は、満員の客でほとんどが外国人でケアンズから45分でいける。グリーン島はサンゴ礁でできた島でバブル期に日本の資本が入り、開発をしたとのこと。移動の船から見るケアンズ市海岸のマングローブの林が素晴らしく、また、海の色は深緑から薄緑、青色へ変



移動の船からの見る海

寄せ方を考えると将来、この周辺の海の汚染が進むのではないかと、また、島の鳥がとの共生も行き過ぎではないかなどと心配になった。素晴らしい自然がなくなってしまうよう祈る限りである。

ためには共生・環境保全が大事である。グレートバリアリーフのサンゴ礁は1、2度温度が上がっただけで死んでしまうので注意している。ボランティアを募集し、植樹をしている。植樹後3年は市が責任を持って管理する。水の汚染の問題、温度の問題もある。実際には注射器での処理を行っている。種類は非常に

多い。市



ケアンズ市 海岸のマングローブ

わり、グリーン島近くでは薄青色に変化し、大変きれいでした。島ではサンゴ礁を売り物にしている。しかし、グラスボード（底がガラス張り）で見ると海底のサンゴ礁は期待したほどきれいではなく、沖縄の海のほうがきれいだという人もあった。

大勢の観光客のサービスとして魚に餌を与えて寄せたり、観光客の押し



観光客でにぎやかなグリーン島



グラスボートからのサンゴ礁

【ケアンズ滞在中の所感】 7月5日～7日

オーストラリア連邦の人口は約2,000万人、面積は769万2,024km²(日本の約20倍)である。今回、我々が滞在したケアンズ市はオーストラリアの北東に位置し、クイーンズランド州に所属し、人口は約12万人で主要産業は観光・リゾート



太陽が降り注ぐケアンズ市の海岸通り

トで、日本の四国の徳島県の日和佐市と姉妹都市となっているとのことである。市内には、ケアンズ国際空港や2つの世界遺産(グレートバリアリーフ、熱帯雨林)を持ち、観光により大変にぎやかで元気のある町である。

街はそんなに大きくなく、ホテルや観光客向けの店が並んでいる。この辺りはほとんど歩いてまわれる。基本的に観光客ばかりなので、店に入っても食事をしていても雰囲気はあまり変わらない。また、日本人の観光客が多く、ちょっと驚いた。

また、日本人の観光客が多く、ちょっと驚いた。

観光客以外でもワーキングホリデーを使って、語学習得等のため留学している日本人も多いようである。しかし、これだけ日本人が多いと自分がしっかりしていないと語学の勉強にはならないのではないかと心配になる。今回のツアーの中では、ウエットランドで会った女性がワーキングホリデーの年齢制限により今年が最後のチャンスで会社を辞めて参加し、ウエットランドの公園管理のスタッフとして日本人ひとりだけがんばっていた。こんな形でがんばれるなら、留学も役に立つのかなと思った。全員とは思わないが、遊んだだけで帰っていく人もかなりいるようである。

ケアンズ市の郊外に出ると家が見当たらず、隣が何キロも先だというのは珍しいらしい。本当に人口密度は低い。また、今回の視察の中では特に市役所の人たちのていねいな対応、親しみのある対応が印象に残った。ケアンズ市では一般の方と話をしたり、生活の状況を見ることができなかったのは、少し残念な感じがする。



ケアンズ郊外のサトウキビ畑

【眼下にグレートバリアリーフを眺めつつ、日本へ！】7月8日

最終日、我々は、ケアンズ国際空港を午後0時30分に中部国際空港セントレアへ向けて出発した。天気は良好で、離陸後、窓から外に目をやると、眼下にグレートバリアリーフが素晴らしい色合いで続いていた。大小のサンゴ礁が白、緑、青ときれいな色調の輝きを放ちながらずっと伸びていた。この世界遺産を保護し永遠に残さなければならないのは、明白なことであるが、地球温暖化のもと1、2度の海水温の上昇でひどいダメージを受けるし、太平洋の島々は水中に没するところもあり、各国とも京都議定書の批准の第1段階クリアーも含めて、人類のため、自然のため、地球のため、世界中の人々は重大な責任を持たなければならない。田原市においても「たはらエコ・ガーデン・シティ構想」に基づき、色々な事業が展開されているところだが、田原市の天与の財産をより有効に活用できるように努力しなければと思った。



最終日、ホテルをチェックアウト

赤道を越えるぐらいから、今回の視察旅行のまとめを考えていたが、疲れからか、安堵感からか、うとうととしているうちに予定時間通りにセントレアに到着、無事着陸した。空港を出た瞬間、日本の梅雨の湿気ある空気に触れ、日本に帰ってきた事を実感した。田原市に着いて解散となったのは、午後9時50分。10時過ぎには全員元気に家に到着した。



飛行機から見たグレートバリアリーフ

平成17年度田原市議会オセアニア行政視察

日次	月	日	曜日	都市名	交通機関	時 間	行 程 表	食事	宿泊
1	7月	1日	金	田原 中部国際	公用車 AO-7950	15:00 08:40	市役所より公用車にてセントレアへ (中部国際空港見学) 空路オーストラリア航空にてケアンズへ	機内	機内泊
2	7月	2日	土	ケアンズ ケアンズ シドニー シドニー オークランド	QF-921 QF-043	04:20 06:30 09:30 11:10 16:30	ケアンズにて乗換 ブリスベンにて乗換	朝食 昼食 夕食	オークランド <small>ヘリテージオークランド</small>
3	7月	3日	日	オークランド ワイトモ オークランド	専用車	終日	『自然環境保護』視察 (ワイトモ鍾乳洞など)	朝食 昼食 夕食	オークランド <small>ヘリテージオークランド</small>
4	7月	4日	月	オークランド ブケコヘ オークランド	専用車	08:30 13:00	フルーツ・野菜・花の一大市場『ターナー & グロワーズ』市場視察 フランクリン地区行政区にて『行政改革』視察 (フランクリン地区行政区公式訪問(ブケコヘ))	朝食 昼食 夕食	オークランド <small>ヘリテージオークランド</small>
5	7月	5日	火	オークランド シドニー シドニー ケアンズ	QF-164 QF-926	09:00 10:25 13:20 16:30	シドニー乗換 着後、ホテルへ	朝食 昼食 夕食	ケアンズ <small>インターナショナル</small>
6	7月	6日	水	ケアンズ マリーバ マリーバ キュランダ ケアンズ	専用車 スカイレール	朝 午前 午後 午後 夕刻	ウエットランド『太古の森の再生』植林地区へ 着後、ブリーフィング・自然観察ツアー 森林再生植林作業体験 太古の森林再生取組視察 世界遺産『熱帯雨林』を視察	朝食 昼食 夕食	ケアンズ <small>インターナショナル</small>
7	7月	7日	木	ケアンズ ケアンズ	専用車	終日 夕刻	ケアンズ『グレートバリアリーフにおける環境 保護の実態』視察(ケアンズ市当局公式訪問)	朝食 昼食 夕食	ケアンズ <small>インターナショナル</small>
8	7月	8日	金	ケアンズ 中部国際 中部国際 田原	AO-7959 公用車	12:00 18:15 21:50	空路オーストラリア航空にて中部国際空港へ セントレア(中部国際空港)到着後 市公用車にて田原へ 市役所到着後解散	朝食 機内	

愛知県田原市議会海外行政視察参加者名簿

役職名	氏 名	党派別	備 考
視察団代表	すずき かんいちろう 鈴木 勘一郎	無所属	
視察団副代表	ふじしろ きよゆき 藤城 清志	無所属	
	おおば さとし 大羽 敏	無所属	
	おおば かつお 大場 克男	無所属	
	ただ たつろう 多田 辰郎	無所属	
	なかがみ まさみち 中神 昌道	無所属	
	かわい なおき 河合 直樹	無所属	
	おやいづ やすひろ 小柳津 保弘	公明党	
	ふじしろ よしのぶ 藤城 好信	無所属	
議 事 課 庶務議事係長	すずき みちゆき 鈴木 通之		



MAP (ニュージーランド)



MAP (オーストラリア)

編集後記

我々、田原市議会海外行政視察団はニュージーランド・オーストラリアの2カ国をまわる8日間の視察の全日程を終了し無事帰国した。今回の視察研修に参加し、特に強く印象に感じた特記すべき事項を述べたいと思う。

最初に環境問題についてであるが、現在、環境破壊により、地球温暖化をはじめとしてのいろいろなところに様々な影響が出てきている。我々の視察先の地域の産業とは、観光と農業が主要なものであり、環境問題とこれらの産業の調和のため、様々な工夫や取り組みがなされていた。本文にもあるが、我々が今回行ったボランティアの植樹は、長い年月の間に失われてきた太古の森（熱帯雨林）を甦らそうというものである。熱帯雨林は、農地や住居を作り出すため、鉱物の採掘のため、木材として使うために次々と伐採され、森はどんどん荒廃をしてきた。昔の姿に戻すには数千年かかるといわれ、国、州、市が対応し大変な努力をしている。我々も植樹に参加したことにより、限りある資源を有効に、また大切に使うていかなければならないこと、後の時代のことまで考えていかなければならないことを強く感じた。単純な太古の森の再生のためというよりも人々の問題の認知のため、情報発信として大変に効果のあることではないかと思う。

反面、ケアンズのグリーン島の状況を見たとき、観光立市を目指せばやむを得ないことなのかもしれないが、自然を守る配慮はされているものの環境破壊につながらないかなと危惧をもったのも事実である。環境保全と観光・開発の両立は本当に難しいことであり、たゆまぬ研究・努力を行い、方向を見誤らずに後世に財産として伝え、共有したいと思う。

2点目は、行政改革に対する取り組みについてである。田原市においても10月1日の渥美町との合併が控えている。職員数は800人を超え、他の市と比べても多い状態になる。フランクリン地区で行われた行政改革を田原にそのまま持ってくるのが正しいとは思わないが、田原市の住民が将来も「夢」や「希望」を持てるように田原市のあり方、進め方をしっかり検討しながら、これはできないではなく、どうしたらできるのかを考えていかなければならない。

議会としても「あるべき姿、何をどうすべきか」をしっかりと考え、市行政に反映できるところは積極的に反映し、見直すところは徹底的に提言、提案していきたいと考えている。

最後に大変多くの教訓や知識を与えてくれた両国の関係者の方々に敬意を表するとともに我々はその教訓や知識を生かして新市のまちづくりに取り組んでいくことを追記し、報告とする。

海外行政視察報告書
(ニュージーランド・オーストラリア)

平成17年8月

編集／発行 田原市議会海外行政視察団